

凍結保存胚の融解移植に関する説明書

1. 目的

あらかじめ凍結保存しておいた初期胚または胚盤胞を融解し、子宮の中へ移植します。

2. 方法

凍結保存していた初期胚・胚盤胞の融解には、急速融解法を用います。

胚移植には、①ホルモン剤で子宮内膜を整えた状態で移植する方法と、②自然周期で子宮内膜の着床期にあわせて胚を移植する方法があります。

3. 成績

当院で凍結初期胚・胚盤胞を融解移植した場合、胚移植あたりの妊娠率は、35歳未満で35%、35歳から39歳で30%、40歳以上で10%です。妊娠あたりの流産率は、35歳未満で22%、35歳から39歳で37%、40歳以上は41%でした。

4. リスクやキャンセルの可能性について

- ※ 凍結・融解後の胚の生存率は約90%です。凍結・融解の過程で、胚が変性・破損してしまう可能性があります。融解した胚が変性・破損していた場合は、胚移植をキャンセルすることになります。
- ※ 胚の凍結・融解が児に及ぼす影響は完全には解明されていませんが、児の先天異常が増加したという報告はありません。
- ※ 凍結胚の融解移植で妊娠が成立した場合に、分娩時出血や癒着胎盤のリスクが高まる可能性が報告されていますので、高度な産科医療に対応可能な医療機関での出産をお勧めします。

5. 費用

原則的に保険診療です。保険適用外の自費診療分は、別紙をご参照ください。

福井大学医学部附属病院 高度生殖医療センター